



年祭、教会長大会を開催



年祭に引き続き、教会長大会を開催。表統領・中田善亮先生のご講話（5月24日）

真朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社



こどもおちばがえり

7月27日～8月4日



こどもおちばがえり
公式サイト



5月24日、大教会で「井筒貞彦四代会長五十年祭、井筒志まへ四代会長夫人三十年祭、井筒敏夫五代会長四十年祭」ならびに「教会長大会」を執り行い、教会長145名、代理6名、在籍者54名、計205名が参加した。

午前9時30分より祭儀式、13交替によるおつとめ。教会長、代理者、在籍者は全員おつとめ衣に身を包み、各自の役割を真剣に勤めた。続いて、祖霊殿の儀。祭文奏上では、大教会長が三柱各々の祖霊様方の数々のご功績を述べ、その後、順次参拝があり、厳かに勤め終えた。

続く「教会長大会」では、表統領・中田善亮先生が講話に立たれ、「これまでの歩みを振り返って、設定した目標や定めた心定めを確認し、たすからないものをたすけていただく、教会が前進していく、そういう姿を御守護いただくために、普段通り程度の発想や実践では届かない『普段通りの心定めを増して三年千日を仕切って普段より頑張らせていただく時。3年と仕切るから頑張れる』（2～6頁要旨掲載）」と、年祭活動の後半へ向け、益々の奮起を促された。

次に大教会長が挨拶に立ち、四代会長夫妻、五代会長の信仰を振り返り、「歴代会長の年祭を勤めさせていただいたこの機会に、一人ひとりが『おちば一条、親一条』の信仰を改めて胸に刻み込んで、それぞれの持ち場、立場でたすけ一条に勇んで動き働いて、教祖百四十年祭を目指して成人の道を進ませてもらいたい」（7～9頁要旨掲載）」と、さらなる勇躍を誓い合い、閉会した。

その後、食堂で直会を行い、志気を高め合った。

三年千日年祭活動も約1年半が過ぎ、今まさに教祖年祭までの折り返し。この1年半の通り方を顧みて、残り後半、益々勇んで通らせていただくこう！

《教会長大会 講話》

子供の成人を願われる
教祖の親心を思案して

表統領 中田善亮先生

自ら考えて定める

教祖年祭の元一日は、教祖御自身が定命を25年お縮めになって現身をお隠しなされた、そこにこもる教祖の思召は、私たちに御期待くださったこと、私たちに求められたことがお有りだったはずだと思ふのです。それは、子供の成人を願われる親心に他なりません。

子供とは私たちです。三年千日は、いつもそのことを忘れず、思案しながら通らせていただくことが大事であることは申すまでもありません。教祖の思召をいつも自分の方に向け、しっかりとその思召、親心を求めるという心の姿勢です。

その三年千日も半分が過ぎようとしています。「果たして、今の

ペースのままで残りの半分を過ごして良いのだろうか」といった思ひは、皆様方も少なからず感じておられるのではないのでしょうか。

しかし一方で、「だからといって、何をどうしたらいいのか分からない」という気持ちもありなのではないかと思ひます。けれども時間待ってくれませんし、どんな年祭の日も近づいていく。そこで今日申し上げたいことは、「三年千日のこれまでの自分の歩みをきちんと振り返っていただきたい」ということです。

このたびの年祭活動については、それぞれの教会が三年千日を仕切つて通ることによって、3年後にどんな教会の姿になりたいと願うのかを、それぞれの教会が自分たちで想定すること。そして、それ

を実現する御守護を頂戴するため、具体的にどんな心を定めて、どんなことに力を入れて通るのかを、自分の責任でしっかりと定めよう、と申してまいりました。

これまでは「こういう心をみんなで定めよう」という目標があり、自分の教会が3年後にどうなるかは、結果として表れてくることであつて、最初からそれを想定することはなかったのではないかと思います。

今回、どうしてそういうスタイルにしたのかと申しますと、多くの教会が100年以上の歴史を重ねまゝして、その現状はそれぞれ違うのです。成り立ちや歴史、存在する場所や地域性、町の現状、教会の教勢、あるいは建屋の現状。そして所属するようばくの顔触れ、すべて違います。50年、100年前とは一つ一つの違いはかなり明らかになつてきていると思ひます。

そんな状況の中で、本部から年祭の具体的なスローガンを掲げて、そこに向かつて心を揃えて進もうと言うには、それぞれの背景や持

つている土台が違う。スローガンを自分のものとして咀嚼して、それを決意として心を揃えようというのは、少し難しくなつてきた現実があるように思ひます。

例えば、「本部はそうおっしゃるが、自分の教会は現状として、それ以前にやらなければならぬことがある」ということです。そういった考え方は尊重すべきだと思います。自分が必要と考えることから次はどうしていこうか」という、次の展開が期待できる。だから、自分たちで一度考えようと申し合わせました。自主的に自発的な精神で、しっかりと子供心を定めようということです。

一つ一つの教会が、「将来どんな教会になりたいか」「どんな人たちが集まるような教会になつていくか」「これを思い描くことはとても大切なことです。地域性も考え合わせ、どういったことに取り組んでいくことが賑やかな教会に繋がるだろうか。

思い描く教会の目標は究極を言



うと「陽気ぐらしに資する教会」になるわけですが、それでは究極すぎて、どこから手をつけていいかが分からない。ですから、「どこから手をつけて」をちゃんと考えようということです。

それぞれの地域で、そこになくてはならない教会であるために、具体的な手立てや道筋を描いてみようということです。いわば中長期的な目標に向け、直近の三年千日で旬の風を頂いて、目標に向かって飛躍を志してみたらどうだろうか、という考え方です。

それと同時に、本部や大教会は、各教会がおちばの理に繋がって御守護を頂戴してもらえるように、おちばとは息一つの教会として、外してはならない根本のところの真実の丹精を、さまざまな形でさせていただくということが一番大事なことだと思います。

いろいろな教会のいろいろな活動の姿があつていいと思います。「何でもあり」ということではありません。私たちは天理教の教会としておちばの理に繋がって、親神様の御守護を頂き、教祖の親心に護られて通らせていただいている。その根本の上に、その理を地域にしっかりとをいげできるような教会の在り方が、言うまでもなく私たちの根本です。

振り返りと再確認

今回の年祭活動の取り組みは初めてのスタイルだったので「自分で考えろと言われてもなかなか難しい」ということも、致し方のないことだと思っています。しかし、自分で考えて設定し、三年千日が

スタートして半分が過ぎようとしている。手探りで始めた当初はともかく、今は少なくとも一年半、自分が考えていること、やっていえることを振り返ってみる要素ができたのです。そこを振り返っていただきたいと思います。

例えば教会が目指す3年後の姿、中長期的な姿、もう少し先の目指したい教会の姿、あるいはそれを実現するため、御守護いただくためにしっかりと心を定め、何を積み重ねていくのか。こうしたことがきちんとして整理できなかったとか、頭の中では描いたが、教会に繋がる方に「こういうことを私は考えて、こういうことをみんなやっていこう」と、言葉としてうまく説明できなかった、そんなこともあると思うのです。また目標の設定が、「1年で達成しそうだ」「3年に見合っていないかった」など、いろいろなことがあるでしょう。

そこで、それぞれ自分の教会のことですから、一旦掲げたことではありますが、見直して、再確認する。年祭活動はまだ半分ありま

すから、せっかくの「仕切りの旬」に仕切りの力を得ようと思うならば、今の時点での振り返りと再確認は、私は大切なことだと思えます。目標の設定や具体的な心定めは変えることはなくても、表現の仕方や声の掛け方などは、もうひと工夫できるかもしれません。

この三年千日の旬が、芦津大教会、またそこに繋がるそれぞれの教会、ようばくの成人の機会となるように、またそれぞれの心定め、の積み重ねによって、教会に新しい動きが出てきたとか、勢いと喜びの実をお見せいただけることが表れてくると、嬉しいのは自分自身です。そういった姿が現れてくれば、「論達第四号」の最後にあります、

この道にお引き寄せ頂く道の子一同が、教祖の年祭を成人の節目として、世界たすけの歩みを一手一つに力強く推し進め、御存命でお働き下さる教祖にご安心頂き、お喜び頂きたい。

との真柱様の呼び掛けにお応えさせていただくことに繋がっていく

と思います。

ひながたを辿るとは

年祭活動は、言うまでもありませんが教祖の年祭です。だから教祖のひながたを辿るということを強調しているわけです。

では「ひながたを辿る」とは、具体的にどういうことなのかを思うと、その意味はとても広いことに気付くと思います。

たすけ一条のひながたですから、おたすけ、にをいがけに力が入らなければならぬのが前提です。

そして教祖のひながたということからして、教祖の道すがらの御姿を想像して、身の行いをはじめ、心の持ち方や思案の仕方など、「教祖に付いていこう」と、自分たちの成人を志して、陽気ぐらしが実践できるように、という捉え方が一番に浮かんでくると思います。

もう少し考えますと、自分の周囲への働きかけ方のお手本というひながたと考えられる一面もあると思います。もっといえば、自分が生きている環境の中で、家庭は

もちろん、教内外の持ち場立場において、周囲からの期待や責任も一方ではあるわけで、それを果たしていく上でも、教祖のひながたはお手本です。

広い意味でひながたを思案する。いろいろな角度からひながたを思案する。ひながたについて、あれもこれもと一生懸命考えることも、ひながたを辿ることの前提として大事なことだと思います。そういうことを3年は忘れずに通らせていただくのが、御存命の教祖と共にある信仰の姿ということもできると思います。

真柱様が昨年の秋季大祭で、「私たちが教祖のひながたに思いを致すときに、教祖はあのかのようになされたとか、このように仰せになったということを通して、よく参考になされることと申うのであります。それはいいことなのでありますが、まず教祖は、五十年の間、どんなことが起こっても諦めることなく、丹精し続けられたということ、これを、これもひながたとし

て忘れてはならないことなのではないかと思うのでございます。」

(立教186年秋季大祭真柱様あいさつ)
と仰せくださいました。50年のひながたの一つ一つを積み上げるだけでなく、50年を通しての教祖の御姿、御姿勢を勉強することもできるとお教えくださいました。決して諦めることなく御丹精くださった御姿勢から、私たちの丹精の心得を学ぶこともできるわけです。皆様方も、教会に繋がる方々や家族の丹精、また心を揃える上で悩まれることは少なくないと思います。しかし、教祖が言うに言えないような御苦勞をなされてまで私たちにお見せくださったひながただと心得て、頭と心を低くして学び、真摯にひながたを辿ることに取り組みたいと思うのです。

信仰の力がある

私たちは、教祖から「ふしから芽が出る」と教えていただきます。節には突然降りかかってくるような身上や事情もあります。一方で、

事前に分かっている人生の節目もあります。

教祖の年祭は初めから分かっている節目です。そして、「年祭活動の句」という言葉は、その当日までの三年千日のことを申します。つまり句とは、ある程度の時間の幅を持つ言葉で、教祖百四十年祭の節目に、三年千日の句を使つて節から芽を出す御守護を頂くことができる、ということです。

「ふしから芽が出る」

と、成ってくる姿はすべて人々を成人へと導き下さる親神様のお計らいであると論され、周囲の人々を励まされた。

と論達の中にも示されていますが、このお言葉は、突然の節を想定された使い方ではないかと思えます。世間でも「節目を契機とする」

「成長の糧として」ということは言います。ただ私たちとの違いは、そこに「信仰の力がある」ということです。親神様の御守護という信仰の力によって得られるものがあると信じているという違いです。教祖年祭活動は、全教の句です。

から、全教会、全ようぼく信者がこの旬に心を揃えていくことで、お道全体にも大きな芽を出すことができるということでもあります。

先ほど、教会によって現状が違うから、実際の心定めや実践は自分たちでそれぞれ考えようと申しました。これは「全教が心を揃えて」という言葉と相反するように聞こえるかもしれませんが、「心を揃える」とは皆が同じことをする

のではなく、それぞれの持ち場立場において、この旬にお互いに励まし合いたすけ合う、その気持ちで共に通る。手を取り合って通らせていただくことによって、それぞれが持つ力が合わさって、1 + 1 が 3 にも 5 にも 10 にもなる。これが御守護です。

ただこの旬は、将来を見ていつもより頑張る、あえてしんどい道を通るときですから、まず自分自身で心を定めないと出発することできません。勇み心は、自分自身が出そうと思わないと、絶対に湧いてくるものではありません。人の力で勝手に自分の心の中に勇

み心が湧いてくるわけがないので、自分がどこかで「勇もう」という積極的な気持ちを持って前を向く。そしてその気持ちで前を向いていければ、周囲にも教友や家族や仲間たちの大いなる力があることに気付くことができると思います。

おちばを慕い親神様の思召に添いきる中に、必ず成程という日をお見せ頂ける。この五十年にわたるひながたこそ、陽氣ぐらしへと進むただ一条の道である。と論壇にお示しいたします。

「ふしから芽が出る」とは、教祖がお教えくださったお言葉です。ただし、言うは易しであって、節から芽を出そうと頑張っても、その道中はもちろん簡単ではなく、山も坂も歯を食いしばって乗り越えなければならぬ道中であることには変わりません。

しかし、教祖が仰ったんだから、きつと頑張り切れる。教祖が先に通つてくださっているから、私たちもきつと通り切れる。必ず成程という日をお見せいただくことができる。喜びの日が来ることを信

じられるということが、何よりも私たちの心強さなのです。

心を揃えて願うこと

今年の元日、能登半島で大地震が起きて、多くの方が被災されました。元日はすべての教会の祭典日ということもできます。三年千日2年目の初日で、2年目の心定めを神様にお約束する日です。その日にお見せいただいたということをお思うと、まさに自分自身にお見せいただいた大節だと思つています。

現地では、今もなお多くの方々が難儀して、水も復旧せず不安な日々を送つておられる状況が続いています。ただ、私たちには、その治まりと復興の御守護を親神様に願うという術すべがあります。その当日から、多くの方がそれを神様に願ひ続けておられる現在だと思ひます。単に願うだけではなく、おちば、親神様を忠として、心を揃えて願わせていただくこともできるのです。

私事です、先日、天理高校の

同級生のある教会長が、突然原因不明の肺炎を起こして命も危ない、という状況になったと連絡がありました。それも、その地域の教友の方、同じ系統の教友の方、私の同級生など、たくさんの方から「神様にお願ひしてほしい」というメールが回つてまいりました。私はすぐにおちばに走らせていただくことができました。また、多くの方がそれぞれの教会などでお願ひをされたと思います。

幸いなことに、今は御守護を頂かれて意識も戻り、みんなの真実を聞いて、「頂戴した御守護はもちろん、皆様の気持ちに大きな喜びと感謝を感じている」と聞きました。元氣になればこれを糧に、さらに奮起して道に力を尽くされたと信じております。

これができるのが信仰のありがたさであり、教友、道の仲間の力だと思ひます。親神様の子供であり兄弟姉妹であるありがたさ、幸せ。共にお願ひし、お願ひをしてもらえるありがたさ、幸せ。節か

ら芽が出るとは、世間で言う「節目を契機として」とは、似て非なるものであることがお分かりいただけると思います。

殊に今は、たすけの句、たすかる句、そして成人の句と聞かせていただくのですから、私たちが心一つにこの句を真正面から受け止めて、結構な追い風に大いに乗らせていただいて、勇んで勤めたいと思います。

日々の積み重ね

たすからないものをたすけていただく、教会が前進していく、そういう姿を御守護いただくためには、普段通り程度の発想や実践では届かないと思います。

教会では人の御守護とお供えについて、毎年心定めをして提出します。この毎年の心定めは、年祭の句であっても生きています。年祭活動の心定めは、その毎年の心定め、つまり普段通りの心定めが増して、三年千日を仕切って普段より頑張らせていただく時。

3年と仕切るから頑張れる。今

ならばあと1年半頑張ろう。ここを頑張って御守護を頂かねばもつたない。私はそう思うのです。そこが「仕切り根性、仕切り力、仕切り知恵」と教えていただくものに繋がっていくと思います。

最近、若い人たちが「楽しんで通ろう」ということをよく言います。しかし「楽しむ」という字と、「楽々」という字は同じ漢字を使うため、思い違いをしてしまうことがあるかもしれません。

最近スポーツ選手が、大きな試合や大会に際して「楽しんで頑張りたいと思います」と言います。

しかしその言葉の背景には、誰にも負けない血のにじむような努力と練習を毎日積み重ね、その努力と研鑽をしてきた自負と自信があり、それに裏付けられた楽しむことでリラックスでき、自分の本領を発揮するということです。

「楽々」とは全く違うということがよく分かる言葉です。

心定めは「これぐらいならできるのでは」というくらいでは、特にこの句は駄目なのです。そこか

ら少し自分に負荷をかける。すると、その「少し」がよく分かる。それを頑張って3年間継続する。そこに一歩成人する要素があり、たすからない人がたすかる元ができると教えていただきます。

お道の基本は日々です。日々の積み重ねが、結局一番の御守護の元となると教えていただきます。あと1年半、それをしっかりと続けることで、「必ず成程という日をお見せ頂ける」と、お示しくださっているのであり、成程の日を信じられると思います。

今は句の真只中です。理屈よりも実践の句ですから、動きながらしっかりとご思案いただきたいと思います。

私たちが親として、子供たちのどんな姿が嬉しいかと想像してみると、勉強でもスポーツでも仕事でも、もちろん立派な成績や成果を挙げてくれることも嬉しいですが、何よりも毎日元気で、自分の役割に一生懸命取り組んで、周りにも気遣いができて、そういう一手一つが分かる、そんな姿があり

がたいし、嬉しいものです。その姿で毎日を頑張ってくれていたら、多少壁にぶつかっていようが、悩んでくれていようが、基本的にはその姿もやっぱり嬉しいのです。

親神様、教祖も同様ではないかと思うのです。教祖は、天の果てにおられる御存在ではありません。皆様の教会の教祖殿のお社においてになって、いつも私たちを御覧くださっています。時に手を引いてくださり、背中を押してください。間違っていれば注意してくださるのです。御存命で私たちの身近にいつもおいでくださる教祖が「最近頑張っているな」と目を細めてくださるなら、その教祖の御表情を想像するだけでも、嬉しくなってきます。

どうか、この句、心を揃え、勇ませ合ってお通りいただきたいと思えます。勇み心に親神様がお働きくださるのです。

芦津大教会の一手一つの更なる奮起をお願い申し上げ、またご期待を申し上げたいと思います。

《教会長大会 閉講挨拶》

ちば一条、親一条の信仰を
改めて胸に刻んで

大教会長 井筒梅夫

皆様方には在籍者、教会長という、芦津の中でも大切なお役を担ってくださり、また教祖百四十年祭への年祭活動には真心のご丹精を頂き、誠に苦勞様です。

今日は貞彦四代会長夫妻と敏夫五代会長の年祭にご参拝いただきまして、大変ありがとうございます。

先程は、皆様と共に十二下りのおつとめを勇んで勤めさせていただき、祖霊殿の儀を厳かに勤めることができました。そして、年祭に引き続き、表統領・中田善亮先生に足をお運びいただきまして、「教会長大会」を開催させていただきました。大会を閉じるにあたり、少し思うところを申して、ご挨拶と致したいと思えます。祖父が出直して50年になります

から、祖父のことを知っている方はほとんどおられないのではないかと思います。父にしても40年ですから、直接仕込みを受けたり、接点があった方はまだ残っております。とはいっても、少なくなってきました。そこで、祖父母と父の信仰を簡単に振り返ってみましたと思います。

貞彦四代会長

祖父・貞彦四代会長は、私が中学2年生の時に出直しましたから、直接の思い出は子供の頃です。私たち孫には非常に優しく接してくれましたが、祖父は嘘が大嫌いであるときちよつとした嘘がばれたところ、「嘘をつくな! 嘘をつくと奴はわしの孫やない!」と烈火のごとく怒られました。まだ小学

校の頃で、小さな孫であっても、嘘は決してつかずに、正直に生きるこの大切さを仕込んでくれたと、今にして感謝しております。

祖父の教会長在職中は、戦前・戦中・戦後の、日本国内もお道も大変厳しい時代でした。終戦間際の大阪大空襲で、大教会神殿と教職舎は全焼し、入り込み役員の夫人が出直すという大きな節がありました。戦後に復興にかかりましたが、もちろん部内教会も戦争で疲弊しているわけですから、神殿復興は並大抵なことではなかったと思います。しかし、祖父は「何としても神様に大教会にお戻りいただきたい」との一念で、固く心を定め、当時の役員や部内の人々の一手一つの尽力で、神殿建物を復興したのです。

た。二代真柱様を心底尊敬してお慕いして、またよくお仕えになりました。そして二代真柱様に厳しく仕込んでいただいたのが祖父でした。

その中でも、ほのぼのとしたエピソードがあります。二代真柱様のお供で大阪に出かけたときに、車の窓から大阪城が見えた。それを指さして、「真柱様、あの大阪城はいずれ芦津で買わせてもらいます」と真剣に言ったというのです。二代真柱様はニコニコと聞いてくだされた、という話が残っています。もちろん一宗教団体が大阪城を買うことは、幾らお金があってもできるものではありません。しかし、この道の親子の会話から、あの時代の先人の心意気、気持ちの大きさに驚きを隠せません。

大変な時代をつとめ抜く役割を担われたのが、貞彦四代会長でした。

志まへ四代会長夫人

その祖父を支えたのが、祖母の志まへ四代会長夫人です。

祖父が出直してから、祖母は東京の真柱様御宅で務めさせていただきました。ちょうどその頃、私は東京の大学に行っておりまして、よく顔を出しに行きました。が、私は祖母から、初代のことや芦津の道をよく聞かせてもらいました。また、御宅の勤務を終えて詰所で同居してからも、井筒家の信仰の元一日をよく聞かせてくれました。私は「もう何回も聞いていました、これがありがたかったのです。」

事あるたびに元一日を聞かせてくれた祖母のおかげで、信仰のルーツをよく理解できましたし、いんねんの自覚もスムーズにできました。

祖母も本当に真柱様の思い一つに、お屋敷の御用に勤めることを無常の喜びとしていました。

年老いてパーキンソン病になり、普通に動けなくなりましたが、26日になりますと、「今日は月次祭や、かぐらづとめに行く」と言うのです。私と神滝本の会長であった松

本和子さんとで神殿へ連れて行き、長崎教区長だった岩切正幸さんが結果で待ち構えてくださった、2人で祖母を抱えて結果内へ連れて行く。本当にしんどい中、かぐらづとめは必ず参拝をしていたことを思い出します。

私はこのつとめ一条、かぐら一条の信仰の尊さを、祖母の姿を見て心に焼け付けることができたのです。

敏夫五代会長

父・敏夫五代会長は、撫養大教会の土佐家に生まれました。戦後、シベリアに11年間抑留され、教祖七十年祭の年の暮れに帰ってまいりましたが、その翌年にはすぐに井筒家に養子に入りました。そしてその翌年、五代会長に就任しましたから、シベリアから帰ってきて、わずか1年4カ月で会長に就任しているのです。

会長になった際に、大教会が難しい事情にあることを詳しく知った父は、初代の道を歩ませていただこうと決意。大教会の土地建物

を全てお供えし、一掛けから出発することを役員さん方に相談したところ、みんな早く「会長さん、その心になってくださいましたか。頑張りましょう」と言ってくださいました。これを二代真柱様にご相談したところ、「分かった。やってみよ」と道の親が背中を押してくださいましたのです。

すべてを納消して、当時阿倍野にありました芦浪分教会に仮移転し、初代の道に立ち返る歩みを始めたのです。当時の世話人先生のご指導から、月次祭のお供えはもちろん、大教会にある金銭は一回残らず本部へ運ばせていただき、かかった経費は本部に頂きに行くという、無い無い尽くしからのスタートでした。

そんな中でも、父や当時の人々は「教祖は貧のどん底の中を人に笑われ謗られ通ってくださいました。教祖のひながたを思えば、わしらは結構や。まだまだ通らせてもら

える」「一生懸命通っていたら、教祖が存命の理で必ず導いてくださる」と、ひながたを頼りに、存命

の理にすがって通られたのです。

あの大変な中、会長を芯に皆が一手一つにたすけ一条に丹精し、本当に苦労の中を、教祖を偲びながら初代の道を歩んでくださったおかげで、5年後には旧神殿への移転が叶い、その5年後に全教に先駆けて「5千人別席団参」を打ち出すまでになりました。この時は8千人が帰参をして、別席を運ぶ期間とした1週間に、中席者が5千200名、初席者は2千474名という成果がありました。事情から10年でこうした御守護の姿をお見せいただいたのです。

これを見た、本部のある先生は、「今まで眠っていた獅子がようやく起き上がった」と言って喜んでくださったと聞いています。

その勢いのまま、数年後には大教会現神殿普請、そして詰所普請と一代で駆け抜けていったのが父でした。いわば「芦津の中興の祖」としての働きをしてくださったと思います。

父の信仰の根本にあるのは、ちが一条、親一条の固い信仰信念で



す。これは初代から代々受け継がれてきた信仰信念と言えます。

大教会が現在地へ移転する前年に、二代真柱様から炊事本部創設の御用を頂いて、尽力しました。これが本部での最初の御用になります。

それまで食事は各詰所で作っており、修養科生は弁当持参で通っていました。真柱様の「おちばへ帰ってきた者に同じ釜の飯を」とのお心に沿わせていただこうと、苦心を重ねて創設に尽力しました。そして一番大きな御用でおちば

の最後のご奉公になったのが、東西礼拝場ふしんです。この重い御用に心血を注いだと言っても過言ではありません。東西礼拝場ふしんのふしん委員会副委員長、実施部長として、ふしん現場の責任を負っていました。

ちょうどその頃に身上を頂いて入院院を繰り返して、手術もいたしました。入院中は体調が良かったです。あるときは、薬の副作用で意識朦朧の中、ベッドから起き上がり、「ヘルメットを出せ！」と言って入院着のまま外に出て行き、周りが止めたということもありました。どんなときも普請のことを心に掛けていたのでしょうか。それこそ命懸けで勤めてくれました。おちばに大きな真実を伏せ込んでくれたのが敏夫五代会長であり私の尊敬する父です。

腹を据えてつとめ抜く

芦津の道は、先人の丹精があつて今があります。先人とは初代を

はじめ、歴代会長のことを指しますが、会長だけ、身近に支えた人だけを指すものではありません。長い年月、眞明芦津の道を歩んでくださった教会長、ようばく、信者、すべての人々を言うのです。

皆様方の親々が、また親々が導き丹精した人々が、一生懸命眞実を尽くして一手一つになって、芦津の道を通ってくださった。そのおかげの今日です。

そして眞明芦津の道の根底に流れているのは、梅治郎初代様から脈々と続く「ちば一条、親一条」の信仰です。この信仰で御守護いただいてきたのです。

歴代会長の年祭を勤めさせていただいたこの機会に、一人ひとりが「ちば一条、親一条」の信仰を改めて胸に刻み込んで、それぞれを持ち場、立場でたすけ一条に勇んで動き働いて、教祖百四十年祭を目指して成人の道を進ませてくださいたいと思います。

あとひと月で年祭活動も折り返りになります。私たち一人ひとりがこれまでの1年5カ月をよく振

り返って、しっかりと思案させていただきたい。

三代真柱様は、「年祭活動は常時のときではない。非常時のときである」と、三年千日を仕切る心構えを、道の者に分かりやすくお仕込みくださいました。「仕切る」とは、腹を据えてつとめ抜くことだと思います。

先ほど中田先生は、「理屈より実践の句である。たすけ一条の動きを継続する句である」とお示しくださいました。

これから百四十年祭を目指して歩む年祭活動の後半を、お互いに改めて仕切り直しの精神を定めて、気に掛かっていることがあれば早速取り掛かり、今やるべきことをしっかりとやって、心勇んでたすけ一条につとめ働かせていただきたいと存じます。

どうか皆様方の弥増しに勇んだ時句の道の歩みをお願い致しまして、閉講の挨拶とさせていただきます。



四代会長 井筒貞彦五十年祭
四代会長夫人 井筒志まへ三十年祭
五代会長 井筒敏夫四十年祭

祭官

祭主 大教会長

扈者 守田 清一

指図方

贊者 西本 義之

献饌長

在籍者一同
伝供

樂人 雅樂奉仕員一同

おつとめ役割

胡三 味琴 弓線	小すりが 鼓ね	太鼓	拍子木	ちゃんば ん笛	地 方	てをど り		胡三 味琴 弓線	小すりが 鼓ね	太鼓	拍子木	ちゃんば ん笛	地 方	てをど り		
瀬戸川真美	中原トク子	岸本仁朗	吉田道治	吉畑俊一	南方洋一	竹内嘉彦	茂田光伸	金田敬子	奥田千晶	加世田陽子	林茂之	北村浩一	今川聖一	七下り目	大教会長	よろづよ八首
山田秀子	梶川りよ子	吉田充人	西窪トシ子	奥野善宣	高岡有典	松本道雄	樋川泰士	河合ふみ子	瀧本美奈子	山本広行	前田貞嗣	北島久嗣	湯川正信	八下り目	瀧本庄司	一下り目
加藤千代美	湯川照代	加世田陽子	加藤仁典	北島和典	谷上真次	木村勝二	岩崎裕樹	吉田裕樹	山田直実	奥田正儀	樋川泰士	望月慶彦	川畑正博	九下り目	岩切正義	二下り目
榎つよ子	山本千晶	奥田千晶	堤白文雄	松本正道	三津井孝道	前田弘文	梶川和人	岡山豊明	荒木志朗	樋川泰士	松本さつき	中村寿々代	森誠一朗	梶川芳征	仁尾智教	三下り目
松岡みどり	木村志保	惠田善哉	奥田正儀	山下吉生	元健一樹	吉田裕也	松林英也	井上康広	瀧本一太郎	石川健郎	望月千代実	花岡由紀子	古堅宗康	比嘉幹男	山本義彦	岡本久昭
中村寿々代	瀧本美奈	岡島藤也	榎喜紀	大信人	吉田昇	中森誠太	松原誠	段野晃雄	原田道弘	山田道弘	榎川浩子	湯川照千晶	奥田敏行	井上隆文	新居実和	中村俊和
足利世司子	山本広石美	岡川秀人	湯川正信	梅本弘昭	奥田道心	藤田幸	小橋正弘	木村真次	奥田良美	八木香織	山上勝正	山田孝徳	宗我道明	西本興正	西本興正	六下り目

《5月月次祭 神殿講話》

成人とは変わることで、
心を変える努力を重ねよう

役員 井筒文夫

「論達第四号」にお示しくくださるように、仕切って成人の歩みを進めることが年祭を勤める意義であり、具体的な成人の進め方については、ひながたを目標に教えを実践すること、たすけ一条の歩みを活発に推し進める、この2つを通して成人の歩みをお望みくださっています。

成人とは、変わることです。自分自身を変えていく上で規範となるところが、教祖のひながたです。教祖は、五十年のひながたの中で、どのようにして当時の人々を教導されたのでしょうか。

まず、この世界はかしの・かりものの世界です。これは、

めへくのみのうちよりのかりものをしらずにいてハなにもわからん

三号 137

と仰せられるように、一番根本となる親神様の摂理、天の理合いです。神様がお創りになり、お定め

くださったこの世界には、自分では絶対に選ぶことができない世界と、選ぶことが可能で自由な世界、この対極する2つの姿があります。まず、絶対に選べない姿とは、

例えば、自分の顔を見て、「木村拓哉みたいな顔だったら」と思いますが。体格も、私はラグビーをしています。いましたから、もともと体が大きくてもつと足が速ければ、違う選手になれたと思います。もし選べるのなら、みんな自分の都合の良いことばかりで、みんな幸せになります。

でも、実際の姿はそうではありません。何一つ選べない、変えることができない姿、それこそ神様

からの与えと教えていただきます。これが親神様がお創りくださった世界、天然自然の一つの姿です。

反対に、自由に選べて、変えていくことのできる世界、姿とは、「心一つの自由の世界」と教えていただきます。与わったことに対して、喜ぼうが、腹を立てようが、神様も一切手を触れられない世界です。

この受け取り方、心の選び方一つで、次の選ぶことのできない与えの質が代わってくる、と聞かせていただきます。ですから、何でも喜ばせていただく、というのがこの道の信仰です。

結構と思い直してでも

しかし、お互いの常日頃はどうかでしょうか。実際の姿として、どんな与えに対しても喜びの心で受け取っているでしょうか。

私たちの心の中には感情があり、喜ぼうと思っても喜べないのが実状です。この感情こそが、癖性分だと思えます。また、この感情こそが、それぞれのいんねんと言わ

れるものです。

教祖の口伝に、「前生前々生のいんねん、今生の癖性分に皆あらわす」とあります。前生、前々生のいんねんが、お互いの感情、性分に現れるものだといえます。「喜べばいい」ということは、頭では理解しているつもりでも、これが難しいのです。

教祖は当時、どのように教え導かれたのでしょうか。『稿本教祖伝逸話篇』に「天に届く理」という逸話があります。

教祖は、明治十七年三月二十四日（陰暦二月二十七日）から四月五日（陰暦三月十日）まで奈良監獄署へ御苦勞下された。鴻田忠三郎も十日間入牢拘禁された。その間、忠三郎は、獄吏から便所掃除を命ぜられた。忠三郎が掃除を終えて、教祖の御前にもどると、教祖は、

「鴻田はん、こんな所へ連れて来て、便所のようなむさい所の掃除をさされて、あんたは、どう思うたかえ。」と、お尋ね下されたので、「何を

させて頂いても、神様の御用向きを勤めさせて頂くと思えば、実に結構でございます。」と申し上げると、教祖の仰せ下さるには、

「そうそう、どんな辛い事や嫌な事でも、結構と思うてすれば、天に届く理、神様受け取り下さる理は、結構に変えて下さる。なれども、えらい仕事、しんどい仕事を何んぼしても、ああ辛いなあ、ああ嫌やなあ、と、不足々では、天に届く理は不足になるのやで。」と、お諭し下された。

一四四「天に届く理」

この逸話の「どんな辛い事や嫌な事でも、結構と思うてすれば」というところを、「どんな嫌なことでも結構やな。どんなつらいことも喜びなさい」という意味と理解すれば、これはなかなか辿れないひながたではないでしょうか。やはり辛いなという不足の思いが先に立ち、「喜べなかったな、成人が足りないな」と思ってしまう。そして「どんなことも喜ぶ

というのは無理だ」と諦めてしまうのかもしれない。

そうすると、陽気ぐらしへ向かって、お残しくださったひながたが、別世界の話となってしまうのではないのでしょうか。

しかし、親神様、教祖は、親心いっぱい、日々私たちをお育てくださっている親です。お互いの癖性分も十分承知されていて、その上でさまざまな姿を見せてくださる。ですから、神様は辛いことと分かって与えてくださるのです。「どんな辛い事や嫌な事でも、結構と思うてすれば」というところを、「今、辛いことと思うことを与えたで。どんな辛いことをしても、もし辛いなと感じたとしても、その途中で、『いやいや、これで結構や、これでいんねんを切ってもらえるんや』と思えば、神様はお受け取りくださる理を、結構に変えてくださる」と受け取ればどうでしょうか。

この御逸話は、「そんなことはできない」というハードルの高いものではなくて、「結構と思えば直して

でもつとめなさい。そうしたら不足の心も、結構という理に変えて受け取りますよ」と仰せくださる、実に優しい親心に溢れた、誰でもが辿れるひながただと思います。

いんねん抜けてるな

飯降伊蔵先生がお屋敷に移り住まれた後のある日、庭の草引きをされておられた。そのとき教祖が縁側より、「伊蔵さん、そこはいんねん抜けてるな。でもあそこは草の根が抜けてるだけや」と仰せられ、先ほど抜いていた場所を指差された。飯降先生は、どういふことかと思案をされ、「あつ」と気付

かれたことがあったそうです。前日の夕食のとき、息子さんが、お替わりの茶碗をそつと差し出される、お給仕に居られた方がお鍋の蓋を、バンと閉められた。子供心にもお替わりしたらだめなんだと分かります。

その夜、部屋に帰って息子の政甚先生は、伊蔵先生に「お父ちゃん、樅本へ帰って大工さんしてよ。そうしたらお腹いっぱいご飯が食

べられるから」と泣いてすがったそうです。

伊蔵先生、本当は辛かったと思います。しかし、奥さんの産後の患いをたすけていただいた元一日を忘れておられなかった。こう息子に言われたそうです。「樅本へ帰って、ご飯をお腹いっぱい食べて、母さん出直すがいいか、ひもじい思いをしながらも、母親と一緒に暮らすがいいか、どちらが良いか」。それを聞いた息子さんは「母ちゃんと一緒にいい」と思い留まったそうです。

そして翌日、「子供にお腹いっぱいご飯を食べさせてやりたい」と思いながら草を抜いていたところを指して教祖は、「草の根が抜けているだけや」と仰せられ、「いやいや、これで結構や、たすけていただいていんねんや」と思い直して草を抜いたところを、「いんねん抜けてるな」と仰せくださったのです。先人の先生方は、こうして教祖に導かれ、だんだんと心を作っていくかたではないでしょうか。喜べなくても、その後に思い直



してでも、「これで結構や」と、心を変えて行く努力を重ねることが大切だと思えます。そうすることによって、必ず天に届く理、神様受け取りくださる理は、結構に変えてくださり、その繰り返しによって、心が変わっていく、成人がかなうのだと思います。

人をたすける喜び

さて、教祖は五十年のひながたの後半は、たすけ一条の手本を示しくださり、人々をお育てになられました。

「をびや許し」をよろづたすけの道明けとし、以来不思議なたすけ

が相次ぎ、教祖を慕い寄る者が次々と出てきました。

しかしそんな中、大和神社の節をお与えになられ、教祖の元に引き寄せられた大勢の方々は、教祖から遠のいて行かれました。その後教祖は、再びその方々を引き寄せられると共に、多くの新たな人を引き寄せられ、導きお育てになられます。

そして明治20年陰暦正月26日、いよいよ教祖の身上が差し迫ってきたとき、「おつとめの時、もし警察よりいかなる干渉あっても、命捨ててもという心の者のみ、おつとめせよ」との初代真柱様の声を受け、おつとめを勤められた。まさに我が身どうなってもという覚悟と決心のもと、おつとめを勤められました。

大和神社の節で、「信心していても、社会的に問題になるようではやっていけない」という人々が、わが命捨ててもと、まさに誠実の思いにまで成人されているのです。

この期間、教祖はつとめの模様

立てを進められると共に、つとめ人衆をも引き寄せられ、成人へと導いておられます。更には、限定的ではありますが、おさづけの理もお渡しくださるようになっていきます。

これは、つとめとさづけによって、人をたすける喜びを教えていただけたのです。人をたすけて我が身たすかるといふ、陽気ぐらしの味わい、人間本来の幸福感、充実感を、当時の人々は体得され、そして成人の足取りが進んでいったのです。

道の苦勞を楽しむ

教祖の口伝に、「道の苦勞楽しんでくれ、道の苦勞楽しんでくれ。道の苦勞楽しんでくれたら、世情幾筋の難儀不自由、皆々喜びに変えるほどに」とあります。

世情の難儀不自由というのは、お互いのいんねんから見せられる節の姿です。道の苦勞とは、にをいがけ、おたすけ、つくし運び、そして心のふしんです。すなわち、この道の教会の御用、たすけ一条

の御用を担わせていただくことではないでしょうか。

お道の御用を担い、つとめに励ませていただくことで、本来、いんねんの上から背負わなければならない難儀不自由をも喜びに変えてくださる。

いんねんからくる大難や小難、難儀不自由の中から心を定め、心を成人させていくのか。それとも、日々神様の御守護を感じながら、道の苦勞を楽しんで御用を担い、いんねんからの難儀不自由を喜びに変えながら成人の足取りを進めていくのか。どちらがありがたいですか。ぜひお互い、この道の苦勞を楽しんで通らせていただくようではありませんか。

年祭活動の後半戦に向かって、教会の御用、たすけ一条の御用を、しっかり担わせていただきたい。それぞれの担う御用が、初席者を与えていただくことに、おちばへの尽くし運びの実績へとつながっていくよう、ご丹精をお願いいたします。

立教百八十七年 五月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、「月日にハセかいちう、ハみなわが子 たすけたいとの心ばかりで」と、温かき親心を以て世界一れつをお育て下され、真にたすかる道へとお導き下さいます御慈愛の程は、誠に有難く勿体ない限りでございます。私共は賜る御守護に日々御礼を申し上げて、御恩報じの思い一筋に時句の御用に勤しみ励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おちばよりお許しを戴きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、心を一つに合わせて、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、五月の月次祭を執り行わせて頂きます。今日を大切な一日と思い定めて御前に参り集う芦津の道の子供達が、日頃賜る御恵みに御礼申し上げ、人を救ける誠の心を湛えてつとめに勇む状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼくは、持ち場立場の務めを真摯に果たして、教祖百四十年祭を目指す時句に相応しい成人の足取りを進めさせて頂きたいと存じます。また明日は四代会長夫妻並びに五代会長の年祭を執行し、続いて教会長大会を開催致します。その者から心分かりてくれと仰せ頂く名称の理の芯である教会長が、改めて仕切り直しの心を定めて、所属するようぼく、信者と共に、尚も勇んで年祭活動を勤め抜かせて頂く所存でございます。

何卒、さんげと心定めを繰り返しながらも、一段とおたすけと丹精に勇み立つ私共の真実をお受け取り下さいまして、年祭活動の上には妙なる御恵みをお垂れ給い、陽気ぐらし世界の実現に向けて一手一つに力強く前進させて頂けますよう御守護の程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

五月月次祭 祭典役割

祭主		扨者	扨者	座りづとめ	前	後	献饌長	
大教会長		岩切正義	竹内義忠	大教会長 瀧本眞二郎 守田清一 會長夫人 前會長夫人 井筒ちぐさ	贊者	湯川正信	岩切正義	岩切正義
指図方		贊者	贊者	岩切正義 岩切宣郎 中村俊和 望月恵美 松森明美 山埜こずえ	湯川正信	西本興正	岩切正義	岩切正義
奥田正徳		奥田正徳	奥田正徳	河合善洋 村田芳征 梶川淳子 中村寿々代 梶川正美	樋川泰士 樋川正博	吉田裕和 川畑正樹	望月慶太 梶川人	望月慶太
吉田裕樹		吉田裕樹	吉田裕樹	宗我道明 岡本久昭 今川聖一 瀧本康紀	比嘉雄朗 堤文雄	山田直吉	山田直吉	山田直吉
山田直吉		山田直吉	山田直吉	奥田富美子 岡島きよの 中村美津代	岩切孝子 梶川文子	奥田千晶 木村理恵	奥田千晶	奥田千晶

喜びの奉告祭

六代会長就任奉告祭

書間分教会

吉野川部属・書間分教会(徳島県東みよし町)は、6月2日、大教会長をお迎えして、元木慎一・六代会長就任奉告祭を執り行った。

書間の道は、大正4年に大西利喜吉を初代会長として三好郡昼間村にて理のお許しを戴いた。初代会長出直し後、長男が幼少であったため、元



木久次郎が二代会長に就任し、元木久教五代会長まで仕え、このたび六代会長のお許しを戴き、奉告祭の日を迎えた。

午前10時、記念撮影の後、元木会長の祭文奏上に続いて、大教会長が挨拶。

会長に対して「この道はありがたいとの心で、一番勇んだようばくとして歩んでいただきたい」と激励し、参拝者には「皆で心を通わせ合い、理想の教会に向かってそれぞれ役割を果たしていただきたい」と望まれた。最後に前会長夫妻に対して、長年の丹精に敬意を表された。

陽気におつとめを勤めた後、元木会長は、「まずは教祖百四十年祭に向けて、時旬の御用の上に誠の心で励ませていただきます」と決意を述べた。祝宴では、喜びの声があちこちに広がり、就任を祝った。参拝者は36名であった。

創立130周年記念祭

大島分教会

大島分教会(加世田洋会長、鹿児島県奄美市)は5月19日、大教会長夫妻、敏成さんをお迎えし、創立130周年記念祭を執り行った。

加世田会長の祭文奏上の後、参拝された大教会長は、引き続き一同に向け挨拶。教会設立を願った先人たちの思いを今に返し、教祖百四十年祭に向けておたすけに邁進するよう激励された。

座りづとめ、てをどりの後、加世田会長が挨拶。大島の道130年の足取りの上に立って、



教祖百四十年祭に向かう決意を披歴した。

この後、境内地のテントを会場に直会。特設ステージは、大島に縁のある唄者・前山真吾さんの祝い唄で幕を開け、各教会や婦人会、青年会、子供たちが明るい歌声やダンスを披露した。最後は、大教会長夫妻の「島のブルース」の歌声に参加者が輪になって踊り、喜びを共にした。

参拝者は382名であった。

少年会キャンプ

5月25日、少年会芦津団(加世田洋団長)は、信太山青少年野外活動センター(大阪府和泉市)で芦津団キャンプを実施。少年会員17名が参加した。

午前10時30分より入所式。遙拝の後、加世田団長から、「火・水・風の親神様の御守護に感謝し、たすけあいの心で自然を満喫して楽しんでください」と話があった。

午前中、参加者はセンター



が用意したポイントを回りながら、自然にちなんだクイズに答えるクイズラリーに、班ごとに挑戦した。

昼食のバーベキューを挟み、午後からは、クラフト体験。万年使えるキューブカレンダーを作成し、お土産とした。その後、人気テレビ番組「逃走中」を実施。大自然の中で、班で協力してハンターから逃げ回り、大いに盛り上がった。初参加の少年会員は、「班でたすけ合って行動し、野外ゲームもとても楽しかった。来年は友だちや弟と一緒に参加したい」と笑顔で話した。

登 用

婦人

松本さだえ

山田 秀子

竹内 淳子

加世田陽子

准役員

望月 慶太

瀧本 太郎

教務部報

教人資格講習会第141回修了

山田 元喜 (當 別)

立教187年5月11日

教人登録

井内 豊明 (徳 修)

信坂 幸 (大真永)

立教187年4月25日

おさづけの理拝戴《4月》

許 霈形 (真明彰化)

許 紘恩 (真明彰化)

石垣ちはる (畦 川)

井上 佳奈 (芦山都)

澄川 佳子 (芦山都)

澄川 陽一 (芦山都)

澄川 和奈 (芦山都)

左近 礼 (芦真勇)

下田 英吾 (本 津)

前田 理世 (四ツ山)

原田 聡 (芦大熊)

《拝戴日順 11名》

初席《4月》

《6名》真明彰化、真明新營

《3名》脇町

《2名》大島

《1名》昭大、上有明、南國、

大玉、沖繩、四ツ山、

周宝、明道

《順序運びより 25名》

教会長登殿参列《5月》

鍋野富士夫 (立 治)

山田 道弘 (當 別)

前田 壽彦 (北 勝)

前田 弘文 (芦 勝)

山田 直実 (東 俱)

荒木 志朗 (恵 庭)

堤 文雄 (太 美)

岡山 豊明 (真大庵)

山下 吉生 (芦山都)

比嘉 幹男 (琉 宮)

古堅 宗康 (芦 沖)

河端 芳雄 (芦 華)

立花 善文 (神の島)

吉田 裕樹 (本明勇)

白髪 正道 (芦真勇)

西本 興正 (本 氣)

藤本智恵子 (本伊丹)

以上17名

計 報



芦出水分教会初代会長(大島部属)
中村祝子姉 なかむら のりこ

令和6年5月22日出直された。享年90歳。

告別式は5月25日、榮安文

・奄美笠分教会長斎主のもと、

鹿児島県出水市の葬祭場で執

り行われた。

姉は、昭和10年3月9日大

阪市港区港晴に生まれ、同25

年御所浦中学校卒業、同33年

おさづけの理拝戴、同62年修
養科第549期修了、同教会長資
格検定合格、同63年教人登録、
平成11年芦出水分教会初代会
長に就任。

地域ひのきしんに従事され
る中、上級教会の声を素直に
受け、教会長として教祖のひ
ながたを心に、いつも笑顔で
優しく、ようばく、信者を教
え導き、旬々の御用にも真実
を尽くされた。

項 目	初	の	修	教
名 称	席	お	養	人
() 内教会数		理	科	
大 教 会	(1) 4	7		
東 津	(13) 3			1
吉 野 川	(23) 2	1		
島 原	(29) 8	1		
日 方	(16) 11	1		
稗 島	(15) 4	1		
本 津	(7) 3	1		
日 高	(2) 1			
始 良	(5) 1			
津 和	(12) 1			
門 司	(6) 1			
當 別	(6) 5	5		2
大 島	(26) 2			
沖 縄	(3) 1			
尼 崎	(2) 1	1		
四 ツ 山	(5) 1			
大 冠	(2) 1			
島 下	(1) 1			
天 保	(3) 1			
青 木	(1) 2			
芦 浪	(1) 2			
甲 邊	(1) 1			
芦 華	(1) 1			
芦 津	(1) 1			
天 入	(1) 1			
豊 野	(1) 7			
紀 周	(3) 7			
勝 明	(1) 1			
神 の 島	(1) 1			
兵 庫 眞 洲	(1) 2			
芦 ノ 郷	(2) 1			
本 明 勇	(2) 1			
明 道	(1) 4			
芦 東	(1) 3			
和 鎮	(3) 3			
神 滝 本 徳	(1) 12	3		
芦 明 彰 化	(1) 3			
眞 明 彰 氣	(2) 1			
本 明 照 伯	(1) 1			
芦 眞	(1) 1			
合 計 (209)	75	24	0	3

月 例 統 計 (自令和6年1月1日) 至令和6年4月30日)